

1963年7月20日創刊 3種郵便物認可 2003年10月1日発行 第41巻第10号 毎月1回1日発行

2003

# stereo

OCTOBER

10

特集:

## アンバランスオーディオ研究

アンバランス・システムを聴く／アンプとスピーカーのアンバランスな関係／アンバランス対決～どちらに重点を置くべきか

集中読書 中級クラスの真空管アンプ

非・常識のサラウンド入門(後編)

長岡鉄男のオリジナル・スピーカー  
未完成モデルBS-11PnC

「連載」

# 音匠 列伝

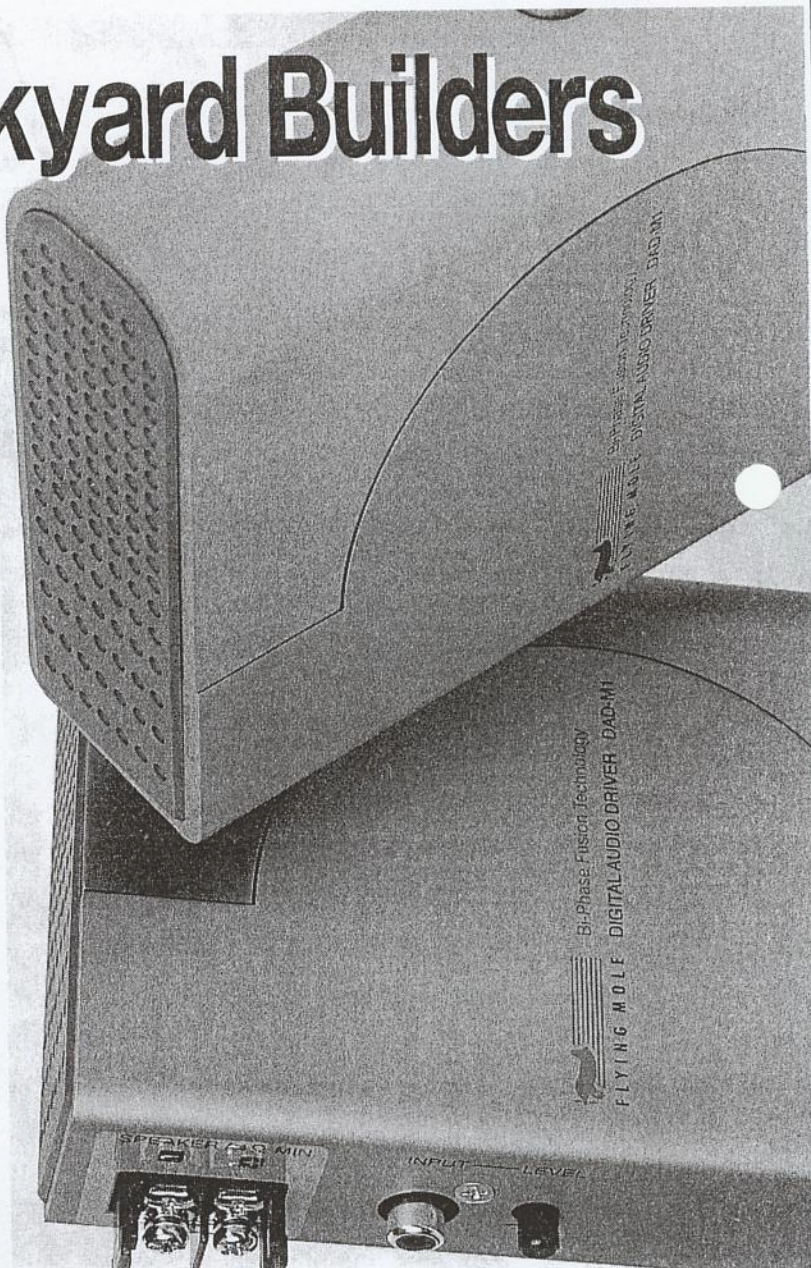
日本が誇る  
バックヤード・ビルダー  
の素顔  
■村井裕弥

はがきサイズで圧倒的高効率と大出力を実現したデジタルアンプ「DAD-M1」を引っ提げて、慧星のごとく現れたフライングモール（＝空飛ぶモグラ）の捕獲に見事成功！「不可能を可能に」を合言葉に、その道数十年のトップ・エンジニアたちが集結。新たな挑戦の火ぶたがここに切って落とされた。

## Japanese Backyard Builders

photo:H.Yamamoto

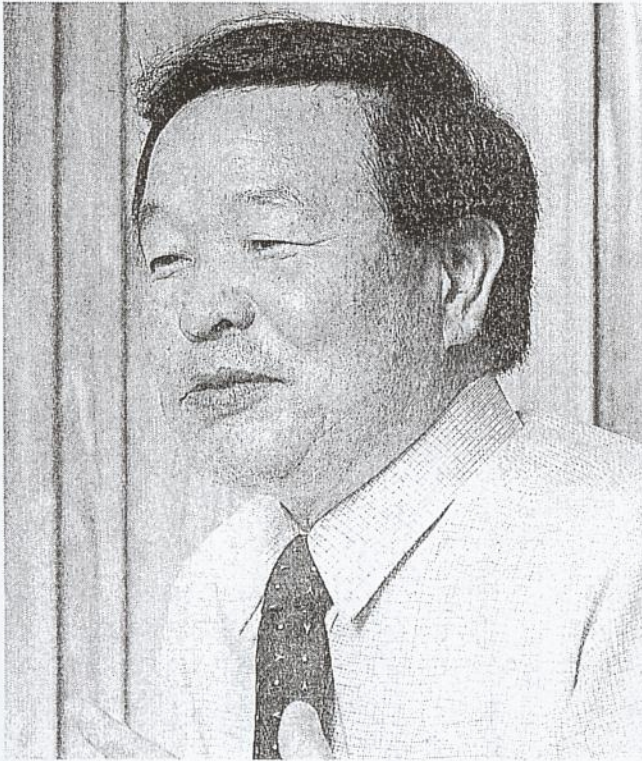
音匠® フライングモール



今こそ解き明かされる  
フライングモールの謎

「村井さん。今月は浜松に行きましよう」担当編集氏から電話がかかってきたとき、無性にうれしかった！だって、音楽に友社に旅費出してもらったの初めて（笑）なもの。しかし、浮かれてばかりはおられない。浜松といえば、当然「あの会社」だろう。音だけで勝負すれば、10万円以下で敵なし！いや、30〜50万クラスだってうかうかしてはいられないアンプ界の超新星。フライングモールだ。

だいたい、編集氏による「ミドルターム・レポート」（5月号）がスゴ過ぎた。



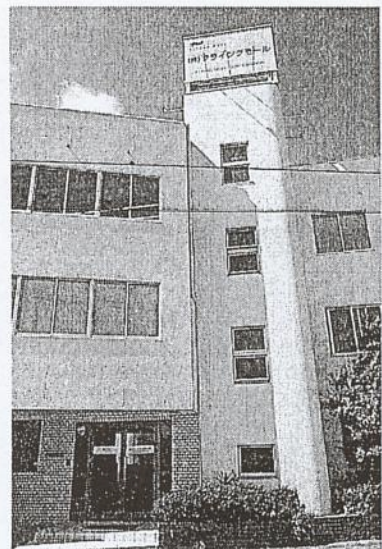
代表取締役 菅原康正氏

某大手メーカーでオーディオ製品の開発に従事、30年以上のキャリアを誇るベテランエンジニアが菅原社長その人である。当時から「アンプとスピーカーの存在をなくす」ことを夢に描き続け、2000年10月、満を持して会社設立へ。アンプの小型化、高効率、低発熱、高音質、大出力実現のための研究を本格化させる。その過程で自然にたどり着いたのがデジタルアンプだった。現在、業務・民生・カーオーディオと着実にビジネスのフィールドを広げており、海外進出の準備も着々と進めているようだ

「気になっていただけらつきやもやつきが  
晴れ、言葉の一言一言が見事に聴き取れ  
るようになった」「ギターのカッティング  
の鋭さ、パーカッションの強弱、手拍子  
のキレなども倍化」「バスドラムもタイト  
に締まる」「鮮度抜群」「数十万円のパワ  
ーアンプが、ペア8万円の小型アンプに  
完膚なきまでに叩きのめされた」と来た  
もんだ。  
当然、問い合わせが殺到したのだとい  
う。

「いくら何でも大げさなんじゃないか」  
しかし、彼はこう言い切るのだ。「あそ  
こに書いた内容に、ウソ・偽り・誇張は  
かけらほどもない。あれだけ書いても、  
わが家で起きたことの半分も盛り込めて  
ない」(編集部注…ええ！ そんなこと、  
言ったっけなあ?)。  
そ、そんなにスゴいのか!?!  
そうこうする内に、僕にもチャンスが  
回って来た。8月号のデジタルアンプ集  
中試聴だ。  
オンキヨー、アキユフェーズ、ポーズ、  
タクト、シャープ。皆、个性的かつ魅力  
的であったが、フライングモールDAD  
-M1を4個使って聴いた富田勲「感賞」  
の音は、その《衝撃度》において他を圧  
倒していた。

「インドネシアあたりの空港に降り立つ  
たときの熱気みたい。音がむんむんこち  
らに迫ってくる(音に取り囲まれる)の  
だ。ふだんウチで聴いている音は、もつ  
と冷静に聴いていられる音なのに」。



フライングモールの社屋は、JR浜松駅より車で20〜30分、浜名湖畔の田園風景に囲まれた風光明媚なエリアに立地。東名高速道路の浜松西インターからも近い



今読んでみると、これじゃ「やけに温  
度感の高い音」と誤解される方がいらっ  
しゃるかも。部屋中に満ちる音の密度と、  
聴き手への迫り方を強調したかっただけ  
なので、そこんとこよろしく！  
しかし、チャンネルあたり4万円で、  
何であんな音が出るのか？ その秘密が、  
今明らかにされる。

**そもそもあの名作アンプを  
手掛けたのが  
菅原社長だった！**

出発の朝、スタッフの1人が東京駅に  
現れなかった(のちに合流した)ことや、  
「炭焼 浜章」で食べた特上うな重の話は  
省略！

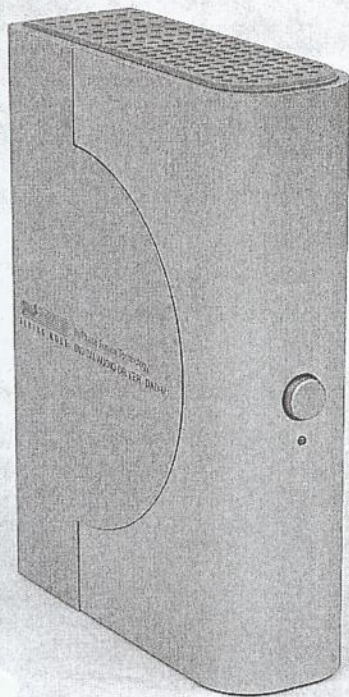
しかし、いったい何で浜松である音な  
のか？ 取材スタッフの1人、カメラマ  
ン氏はこう語る。

「僕は、ここんと2月に何回も浜松に来  
てるんだけど、全部別の要件なのよ。取  
材先もジャンルも全然違う。浜松とい  
うと、みんなすぐ某大企業を思い浮かべ  
るんだけど、実はあそこだけじゃないん  
だよね。流通のシステムがしっかり完成し  
てるから、いろんな会社があそこを集ま  
ってる。正に日本のど真ん中なワケよ」。  
へえ。そうなんだ。

タクシーに乗って「和地(わじ)町の  
フライングモールまで」とお願いする。  
しかし、移転したばかりで、どこにある  
のかよくわからない。やむなく、フライ  
ングモールに電話をかけ、あちらの指示  
に沿って運転してもらった。

「向こうに、うっすら山が見えるだろ。  
あそこはもう愛知県だ」。

フライングモールは、そこからすぐ。  
青い入道雲をバックにそそり立つ真っ白  
な新社屋。こ、ここであのDAD-M1

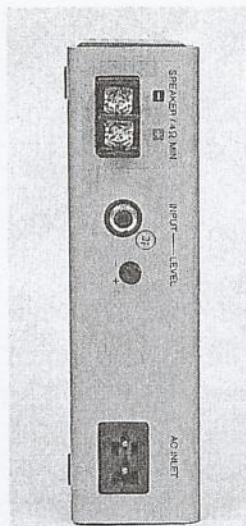


DAD-M1 ¥40,000(1台)

「小型、低発熱、消費電力が少ない」という従来のパワーアンプでは成しえなかった課題を見事にクリアした、革新のデジタル・パワーアンプ。電源部とアンプ部を融合する「BI-Phase Fusion Technology」の採用によるパーツ点数の最小化、85%という驚異的な総合変換効率、オーディオ信号を0.2~5.0MHzに変換する特殊な変調方式でのアンプの高周波化、0.2MHzの固定周波数による電源部の高周波化、自社開発の断熱材「KY-1」を使ったケース温度均一拡散技術（特許申請中）など、最新技術の集大成でハガキサイズながら160W（4Ω時）の大出力を実現した。

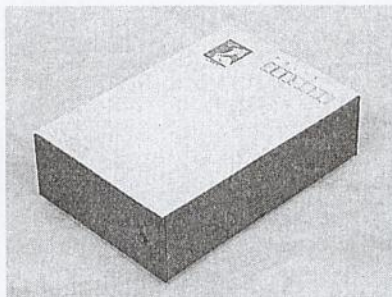
Specifications

定格出力：160W(4Ω)、100W(8Ω) ●周波数特性：DC~50kHz(+0、-3dB/8Ω)、DC~25kHz(+0、-3dB/4Ω) ●全高長波歪率：0.02%(1kHz、50W出力時) ●SN比：120dB(400Hz~30kHzのBPF使用) ●入力感度：1V(入力ボリューム最大時) ●入力インピーダンス：10kΩ ●消費電力：20W(1/8パワー出力、100W/8Ω)、30W(1/8パワー出力、160W/4Ω) ●待機電力6W(無信号時) ●入出力端子：RCA=1 ●使用温度範囲：0℃~40℃ ●大きさ：150W×41H×106Dmm ●重さ：約780g

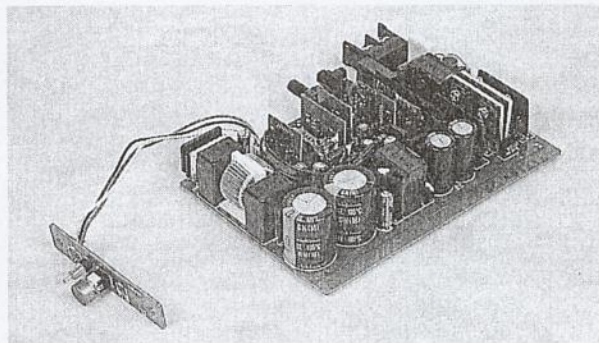


「生まれれたのか？」  
「いやあ。遠いところをわざわざおいでいただきました。」  
海外営業部の亀岡さんと笹原社長が、さわやかに迎えて下さる。  
「建物が新しいですねえ。」  
「街中から引越して来たばかりなんです。よ。おかげで、ちゃんとした試聴室も確保できるようにしました。」  
「そうなんだ。最初、電話したら『この番号は、ただ今使われておりませんが』って言われて、びっくりした(爆)んですが。」  
「新幹線の駅からはちいと遠いんですが、浜松西インターのすぐそばなものですか

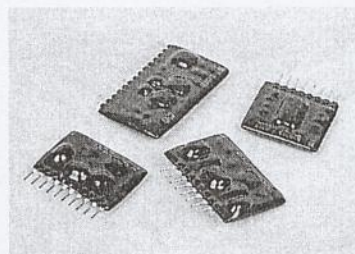
ら、東京との行き来は、かえって楽になりました。」  
笹原社長からは、このあと海外におけるオーディオ・イベントのお話をうかがった。欧米でも、アジアでも、フライングモールの音は大評判なのだそう。  
「やっぱりこれからは、ホームシアターの時代じゃないですか。中国・香港・台湾では、60年代の日本におけるステレオ装置がそうであったように、AV機器が一大ステータス・シンボル。みんな、友人を家に呼んで、見せびらかすわけです。だから、ものすごく売れる。今後も右肩上がりの需要が予想される。しかし、映



試作機はこの通りジャストのハガキサイズ。デザインは、日本の産業用製品デザインの草分け、(株)GKインダストリアルデザイン社が担当。アルミを用いたクールな意匠が好印象だ。モノラル構成、入力ボリューム付きと、自在に使いこなせる一品



DAD-M1内部のICチップと基板モジュール。フライングモジュールは各種ICや電源部の製作、そしてサウンドデザインまでも自社で行なえる希有なメーカーである



像付きならまだしも、その装置で音楽CDをかけたりますと、途端にシラケてしまうことが多い。そこで、DAD-M1の一番になるワケです。AVアンプのプリアンプを鳴らす。たちまち、何ランクも上の音が飛び出して来る。」  
DAD-M1を一度でも体験している人なら「そうそう。それそれ」とうなずける話だ。当然、編集氏とボクは大きくうなずく。  
「でも、フライングモールの人たちって、何でそんなに突然いいものが作れるんですか？」  
笹原社長たち、一瞬動きが止まる（な、なんかヤバイこと言ったか？）。  
「それはですねえ。」

そう言ったとき、笹原社長奥に引込む。そして、しばしののち、分厚い冊子を手を現れる。  
「ここに、日本工業史を代表する傑作がわんざか載ってるんですが——。」  
「あつ。これ、ボクが中3のときサイコロに欲しかったプリメインなんです。カッコ良かったなあ。だいたい、日本初のA級アンプですよね」  
「——実は、それが作ったんです。」  
JBL4345が  
キリキリ舞い。  
ア、アンプはどこにある!?!  
「……………」  
正直な話、しばらくは口がきけなかった。

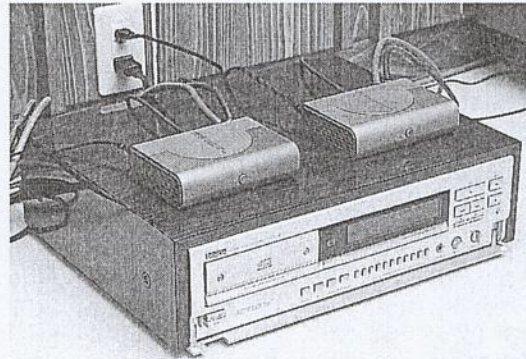
# 音匠列伝◎フライングモール

そうか。そうなんだ。だからこんなに素晴らしいデジタルアンプが作れるんだ。あその会社にいた、あのチームがそっくりフライングモールになつてたのか。

数分後、僕たちは試聴室に案内された。ガンガン鳴らされていたのはJBL4345。4344のウーファーをひと回り大きく(15インチから18インチに)した稀少モデルだ。持っている人は多くても、ちゃんと鳴ってるのは滅多に聴けないのがこのシリーズ。しかし、その4345(当然4344より鳴らしにくい)が、プリアンプ鳴ってる!



部屋の最上層にある試聴室には、JBL4345が鎮座する。デノンのCDプレーヤーDCD-3500を床に直置き、その上のDAD-M1を載せるという型破りのセッティング(?)ながら、4345を見事に鳴らし切ってしまう!



しかし、このときの僕たちの衝撃は、そのおおよそ半分が「視覚から来るもの」だった。そりゃ、DAD-M1の威力は充分知っている。だから、浜松まで来たのだ。でも、巨大な4345が左右にでーんと構え、その中央に、10数年前のCDプレーヤー、カーペット直置き。そのCDプレーヤーの両肩に小さなこぶみたいなものが付いていて、よくよく見るとそれがDAD-M1なのだ。その「こぶ」が、4345をキリキリ舞いさせてる! 「高効率スピーカーなんだし、DAD-M1の駆動力をもつてすれば、まあ鳴る

「どうです? 良く鳴ってるでしょう。」  
「良く鳴ってるなんてものじゃないですよ。僕たち、オーディオに関してはけっこうスレてますから(笑)、ちょっとやそつとじゃ驚かない自信があるんですが、この4345はスゴい。しかも、視覚的効果抜群。大きなスピーカーが鳴っていると見せかけておいて、『実は、これが鳴ってるんです』と人を驚かせるデモを某社がやっていますが、あれ以上にびっくりですよ。大きなアンプで鳴らしていると見せかけて、『実は、このDAD-M1で鳴らしてるんです』なんてデモやったら絶対ウケると思うし、いつそのこと、アルミ削り出しの筐体に付けて50万円くらいで売ってほしい。」

「だろ」なんてお気楽に考えてもらいたくない! 誌面に載る写真を、穴があくほど見詰め、その場の空気をよく感じ取っていた。だいたい。

**ICも電源も音作りもする  
トータルデザインの強み**



開発担当部長 山田康夫氏  
「小型高性能機をようやく実現にこぎつきました」。笹原社長と長年苦楽をともにしてこられた盟友の言葉は、充実感に満ち溢れていた

「そのときには、もうM1のめど立って

「デジタルアンプ用ICを作っているA社の技術者は、ICのことしか知らない。電源を作っているB社の技術者は、電源のことしか知らない。彼らはもちろん、音の善し悪しなんか分からない。こんな2社の製品を買って来て、アンプを作ってもいい音になるワケがない。」

■現在発売されているデジタルアンプ用ICは、そのほとんどがピュアオーディオ用とは呼べない。出力もせいぜい50Wまで。ウチは、ピュアオーディオのクオリティと100W出すことを最初から考えている。その違いが大きい。

こんなお答えが返って来た。

ところで、フライングモールの会社設立は、2000年10月のこと。

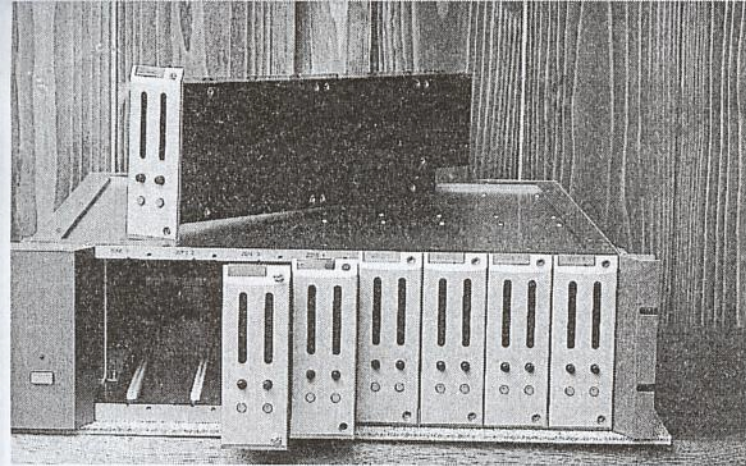
を訊いてみると、

■デジタルアンプのICを作っているメーカーは、世界にたくさんあるが、彼らはオーディオ機器を自分でまとめ上げた経験がない。数え切れないほどのアンプを作ってきた当社技術陣との差はそこにある。

■デジタルアンプ用ICを作っているA社の技術者は、ICのことしか知らない。電源を作っているB社の技術者は、電源のことしか知らない。彼らはもちろん、音の善し悪しなんか分からない。こんな2社の製品を買って来て、アンプを作ってもいい音になるワケがない。



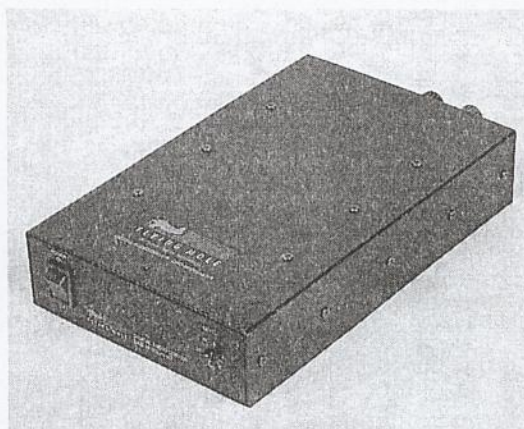
電源担当部長 尾川祐司氏  
「デジタルアンプも結構発熱します。DAD-M1は密閉構造なので、断熱材で基板全体を覆いケース全体に熱を分散させています」と熱対策のノウハウを丁寧に説明して下さい



DPA-M1616 Cascade (価格未定)

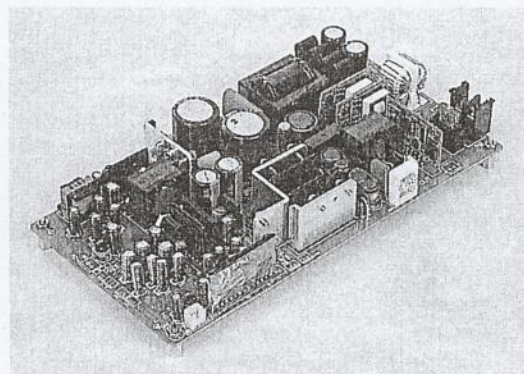
今秋発売予定のスタックブルタイプの新製品。1ユニットに2ch分のパワーアンプを納め、最大8ユニット=16chで使用可能。また世界の各種安全規格(電気安全法、UL、CSA、CB証明)を取得予定とあり、プロ用の音響設備から、民生用のカスタム・インストレーション、AVホームシアター、スピーカーのマルチアンプ駆動と活用範囲は広い

「ええ。原型にあたるモジュールが完成してしまっていて、電源も出来てきたから、NS-1000Mを鳴らしてみたい。」  
 「ええっ!? センモニですか。あれも鳴らしにくいスピーカーですよ。」  
 「そうです。でも、そのセンモニがあまり鳴っちゃったんですよ。いっしょに聴いていたメンバー全員がびっくり。『こんなにスゴいんだ』って、自分たちの試作品に腰を抜かしてしまいました。」  
 「あの頃の国産スピーカーって、ものスゴくお金と手間ひまがかかっているんですよ。ただ、あの頃のアンプじゃ鳴らなかった。」



DAD-M100pro

こちらも新商品で主にプロユースを意識したモノラル・パワーアンプ。内容はDAD-M1がベースだが、世界の各種安全規格に準拠。RCA入力+スピーカーターナルの「HT」、RCA入力+ネジ止め式ターミナルの「C」、バランス入出力の「B」の3タイプを用意する



「あのとき、『この会社は絶対うまく行く』って確信しましたね。音的には、管球式に近いものでしたし。」  
 ちなみに、その試作機は、効率90パーセントという驚異的な数字も叩き出した。  
**理想はアンプとスピーカーの存在をなくすこと!**

また、「トータルで何台売れているのか」こっそり尋ねたら、予想よりひと桁多い数字が。  
 「ええ、そんなに売れているの!? 信じられない。」  
 「それも、ありがたいことにほとんど『指名買い』なんです。『フライングモールのアンプ下さい』と言って、お客様が入っていらつしやるらしい。」  
 「は。安い、音がいい、小さい。言うことなしだ。」

その大きさについて、笹原社長はこんなことも話してくれた。

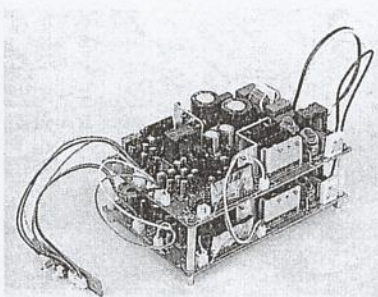
「ずつと前から、個人的には『アンプとスピーカーの存在をいかになくすか』ということはずつと考えて来た。壁に埋め込まれていても、存在が分からなくて、いい音が出せるシステムを何とか作れないか。」

「大きくて、熱が出る、というのも何とかしたい。小さくて、発熱が少なく、消費電力が少ないもの。ホントは、はがきサイズじゃなくて、カードサイズにまでしたい。」

「デジタルは自己目的じゃない。これらのコンセプトを実現するための手段である。」

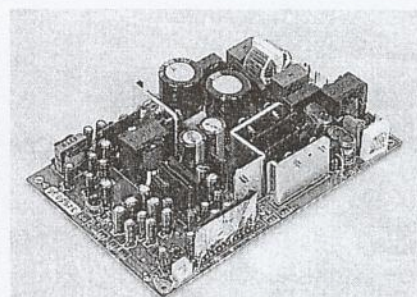
笹原社長は、こんなことも教えてくれた。

「とにかく部品点数を減らせと、くり返



APS-M300G

あらかじめ基板モジュールが2枚構成のタイプ(300W/8Ω)もある。基板の配置は2段重ね、並列置きなど自由にレイアウト可能



APS-M160 IIG

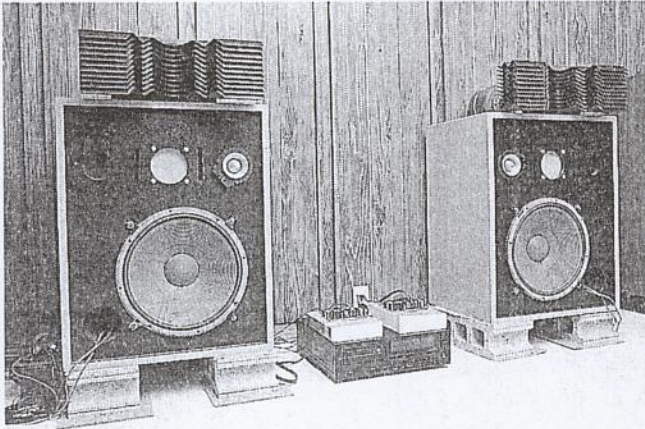
業務用限定で基板モジュール単体の販売も行なっている。2台のブリッジ接続で300W/8Ω(1台では160W/8Ω)の大出力を得ることもできる

「言い続けたんです。一つの部品にいろんな機能を多層で持たせている。これは、小型化のためだけにじゃないですよ。小さくするとシグナル・パスが短くなって音も良くなるんです。」

「マニアからは、電源ケーブルやスピーカーケーブルのターミナルに関する要望も来るという。」

「皆さん『こんなターミナルじゃダメだ』みたいにおっしゃるんですよ。しかし、私たちはわざとやっていると。言っちゃ何ですが、最近『企業がマニアのやる

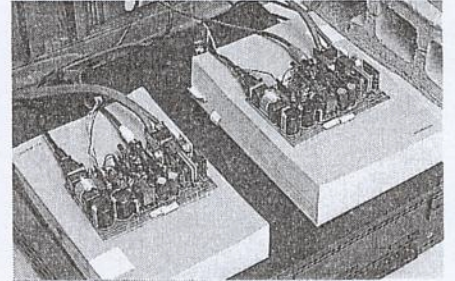
# 音匠列伝◎フライングモール



## フライングモールDATA

- 所在地：〒431-1115 静岡県浜松市和地町5199-1
- TEL：053(486)6030
- FAX：053(486)6033(営業)/05(486)6730 (技術)
- URL：http://www.flyingmole.co.jp/
- E-mail：info@flyingmole.co.jp

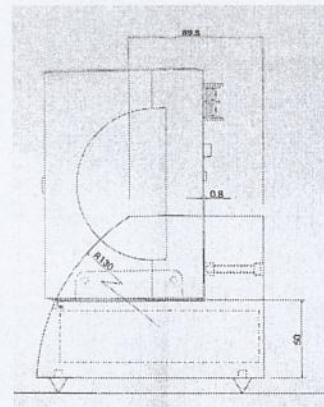
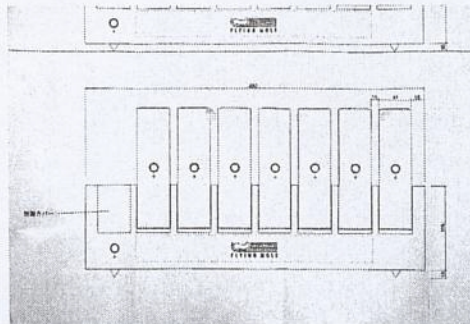
もう一組のリファレンススピーカーは、JBLユニットをショップの自作ボックスに収めたもの。「我々みんな、昔からのJBLの音に慣れ親しんできたんで、チェック用に最適なんです」



ことを奪っている』みたいなのがあって、私たちはあまりいいことだとは思っていません。電源ケーブルを太くする、何か貼る、金メッキするなどなど、そりゃ音は変わりますけどね。でも、それはマニアが楽しんでやることでしょう。そういうのじゃなく、企業はもっと正攻法だけで勝負すべきだと思うんです。だから、DAD-M1には、ラジカセの電源ケーブルみたいなのを、わざと付けています。もっと細いのもいい。デジタルアンプなので、大した電流流れないし。」

しかし、その電源がやはり生命線なのだともおっしゃる。

「ごくごく一部の例外を除けば、ステレ



現在開発中という「DAD-M1スタックアップ用ケース」の図面を披露していただいた。素材にはアルミの無垢を用いるとか。その他、プリアンプやカー用パワーアンプも計画中。将来的にはスピーカーの開発予定も

オアンプの電源は左右共通。AVアンプに至っては、5チャンネル、6チャンネルの電源が共通ですよ。でも、そうしてるのはコストダウンのためなんです。メーカーのための論理。音のためにいいことは何もない。」

**気になる今後の動向は？**

以下、公表できる範囲内で、今後のご予定もろがった。

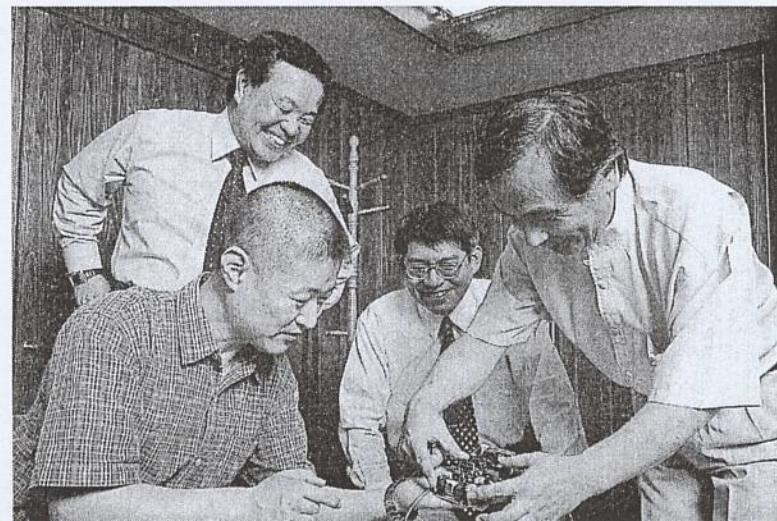
「我々はDSPプロセッサはやる気ないです。でも、アルミ無垢のスタンドを作ろうかなあ(笑)と。M1が縦に8台入るようなの。これで5・1、7・1でも使いやすくなる。これから出すデジタル

ここまで小さいとは！音を聴かないと衝撃は伝わらないかなあ

一つの部品にいろんな機能を多層で持たせているんです

ル・プリも入れられるようにしたいですね。ハイエンド・ホームシアターなんという言葉が飛び交っていますが、いくら高価なパーツを使っても、一体型は一体型。各チャンネル独立・電源も独立と同じ音にはなりません。7・1チャンネルで28万円。ちようどいいお値段でしょう。そうそう。カー用のが、近く発売になります。この記事が載る頃には出ています。」

最後に、こちらから「入り口からスピーカー直前までのフルデジタル・システム」を熱烈リクエスト。「お任せ下さい」とばかりに、どんと胸を叩かれたから、楽しみに待つことにしよう。



# 特集 ● アンバランス オーディオ研究

「バランスのとれたオーディオシステム」ほど味気ないものはない！ そう高らかに宣言しよう。均整がとれすぎて「思考停止」、やがてはオーディオ趣味終焉、なんていう悲惨な末路は目に見えているのである。そこで提案。価格、大きさ、キヤラクター、何でもいいからとにかく進んでバランスを崩すべし！ 不安定状態に潜む「究極の悦楽」を享受してほしい。そのときに今回用意した「アンバランス」ネタが少しでも役立つならば、これ幸いである。





# アンプとスピーカーのアンバランスな関係？

田中伊佐資

スピーカーとアンプの関係において、思い付く限りのアンバランスをここに提案しよう。いや、結果を先取りしてしまえば、実はどれも「あり」なのだ。人間なんてあまねくアンバランスな存在なのだから、オーディオシステムだって、とことんバランス崩すべし！

自分不在型  
グッドバランスシステム  
もの申す！

現在の私のスピーカーは、JBLやカウスのユニットを寄せ集めては適当に箱にくっつけたヒョウタンツギのようなものである。が、その昔、極めてまっとうなスピーカーを愛用していた時代があった。そのスピーカーはティールのCS5（のちにCS5iにバージョンアップ）といい、いまはもうカタログに載っていないが当時のフラッグシップモデルだった。

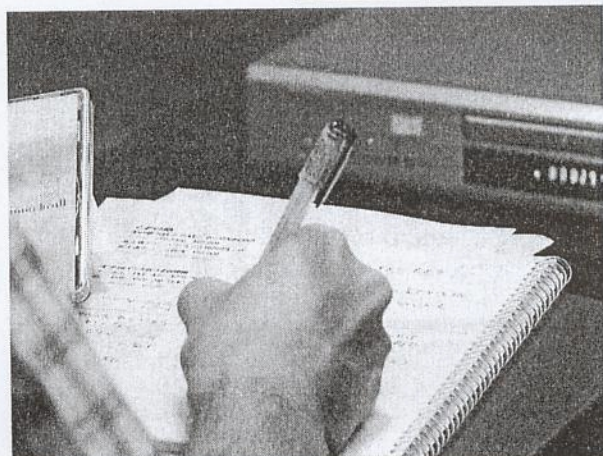
その音は今でもちゃんと記憶に残っている。それはもう臨場感たっぷりの素晴らしいものだった。広漠とした空間に一音一音の所在が手に取るように分かった。位相がきちり合い、どこかの帯域に偏りがなく、なにもかもすべてのバランスがとれている世界だった。

それをこともあろうにわずか数年で暇を出してしまった。破綻や屈託のなき、クールでマシン然とした鳴り方が鼻についてきたのである。「ここで熱くならなかったら、いつ熱くなるんだあ」とボディの首根っこをつかんで揺すりたいたい衝動が抑えられなくなったのである。

ジャズ的にいえば、ドラムスティックの先端が飛び散るようなトッピンバルの衝

撃音や怒濤の寄り身をかましてくるベースのプリンを突出して聴きたいわけである。こういう何かを特化させる音は一般オーディオ的見地（なんじゃそれ？）からみれば、アンバランスである。だが、私の中にある音のバランスはこういう要素があつてこそ均整が保たれる。

哲学者とその弟子の会話のように理屈っぽい、CS5はフラットなグッドバランスゆえに私のひねくれた耳にはアンバランスだったのである。そして現用のひょうたんツギスピーカーは、客観的にみて「バランスがいい」とはとても言えない。「アン





ERIC CLAPTON/CROSS ROAD 2  
1974~78年のライブ音源中心に構成された4枚組ボックスセット。試聴曲は1枚目の1曲目「ウォーキング・ダウン・ザ・ロード」。これが超高音質で「アンプラグド」の奔りといえる内容

バランスがいい」スピーカーである。  
というわけで何がなんだかよく分からなくなってきたが、どこか虚空に尺度を想定した自分不在型グッドバランスはあまり重んじないほうがよろしいかと思う。それは結局、欠点つぶしにつながり、変哲と旨味のない音になる。そう私は踏んでいる。  
これから8ページに渡ってバカバカしいほどアンバランスな設定での試聴記を書くわけだが、どれもなかなか愉快だった。普通、やろうと思ってもなかなかできない、というかそれ以前にやろうとは思わないアンバランスぶりだったので。  
往々にして突拍子もないところにぎりぎりとした魅力が潜んでいたりするのがオーディオだ。

●試聴アルバムについて

85頁「注目製品ファイル」で、オレにも聴かせると山本カメラマンがカバンから取り出したのが、「エリック・クラプトン／クロスロード2」だった。1974~78年に行われたライブツアーの様子が収められている4枚組である。実はこれすでに持っているのだが、完全に存在すら忘れていたのだが、完全に存在すら忘れていて、凄いやだね」と新鮮な感動に包まれたまま、即中古店で買ってしまった。

試聴曲はディスク1の1曲目「ウォーキング・ダウン・ザ・ロード」。この曲と4枚目の数曲がスタジオ録音で、その音の生々しさにぶっ飛んだ。演奏はギター、ベース、ドラムスの三人によるロバート・ジ

## A・部屋にまつわるアンバランス

### 狭い部屋 大型スピーカー II 和室六畳間でJBL 4348

六畳のどこかが狭いんじゃない、こっちは四畳半だ、狭くて悪かったなっ、けっ！ いきなり市民感情逆なで、「ステレオ」焚書運動が勃発してもおかしくない

ジョン・スタイルのダブルス大会である。この熱さは尋常でない。「アンプラグド」の原点」と山本氏は言っていたが、はいその通り、いやもつと凄いかも知らない。良いものを教えてもらいました。

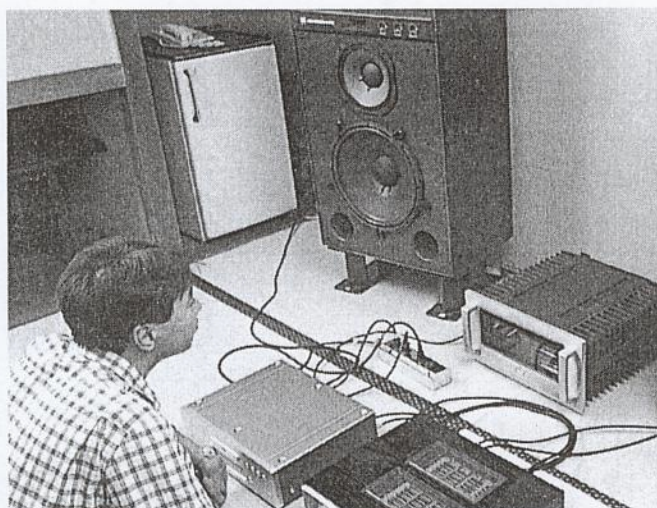
タイトルである。

六畳が狭いか広いかはともかく、4348の巨体を前にし、かぶりつき・砂かぶり・汗かぶりでも聴くことには間違いのない。で、これが見た目（いや実際にも）窮屈なのだが、意外にもたいそう心地よく聴けた。



6畳間にJBL 4348を無理やり押し込むの図。不思議と4348の木目が和室にもマッチする。駆動系も、デノンDCD-SA10+アキュフェーズC-2800+同P-7000と濃腕大集合で総額¥4,030,000也。風呂なしトイレ共同で家賃2万円とすれば、その差なんと200倍！

これ、結構カイカン！  
直接音に浴びせ倒されたし



とにかくクラプトンのギターは直接的にビーンと耳の穴奥まで到達した。スピーカーから出た音をそのまま全身で受けとめるわけで、大きな部屋では体感しにくいある種の快感がある。ここまで近いと機器の直接音がほとんどだ。ルームアコースティクスとは無縁の環境である。  
ポイントから外れるが、畳敷きがひとつのキーになっている。スピーカーボードを敷かなかったら、ゆさゆさ揺れる気配もある。スピーカー設置セオリーから大きくはずれている。ところがどうしたことが低音が心地よく弾けている。  
これがアンバランス・セッティングの

妙だ。うまい具合にもっともらしい説明がつかないので、深く言及しないまま次に進む。

## 広い部屋十超小型スピーカー

### 27畳間でオーディオプロ

### オールルームSAT

総額18万円のシステムである。しかし、

「ステレオ」誌の試聴室は広さ27畳(約44㎡)。対するスピーカーのオーディオプロオールルームSAT(¥40,000)は110W×150H×160Dmm、3.3kgと極小超軽量。しかし、点音源の効果か、空間の広さが幸いしてか、満足度99%。「まさか……」と色を失うテスター田中

これほどの「だだ」がつくほどの広い部屋(試聴室は約27畳)に置くと、前述の六畳間で聴く総額400万円システムのの方が貧相にみえる。不思議だ。なんだか4348の前で正座してカップ麺をズルズルする小池さんが目に浮かぶ。それはともかくこの音は、フライングモ

ールDAD-M1がすべてだった。とんでもない馬力がある。筐体から考えれば、神秘や謎の領域まで踏み込んでいる。あきれ笑いを何度か漏らしてしまった。

応えるオーディオ・プロのオールルームSATもたいしたものだ。写真を一瞥してお分かりのようにまさに点音源ともいえる構造が効いている。ポーカー、ギターは幻影的にフワリと浮いて聴こえた。

エッジの効いた立ち上がりも俊敏で、こういう音を出されると、なにかにつけて大枚をはたいている私としては、困ってしまふ。嚴重に抗議したい(誰に?)。

といつても、広い空間があつてこそ、この音である。都会でこの部屋ごと自分のものにしよとすると、軽く億単位の資金が必要になる。ということ、ひとまず自分を納得させておく。

## スピーカー位置のアンバランス

### 〈壁と平行にしない〉

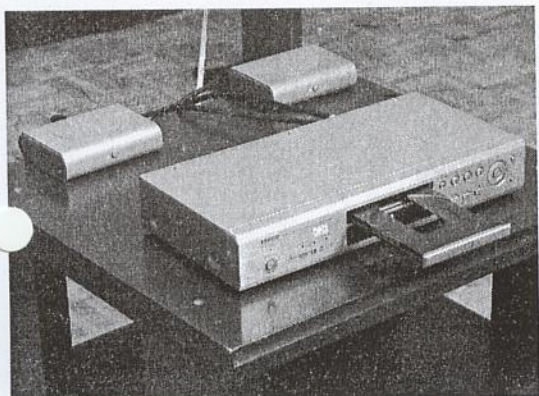
スピーカーセッティングの完了後、思わず爆笑。「ありえね〜」を連発していたら、そつえば村井裕弥さんは、部屋をリフォームする前はこうだったなと思ひ出した。「ありえる〜」に謹んで訂正。

試聴曲の難所は、ベースとバスドラの分離である。ベースのズンズンがバスドラとかぶっちゃやう。「せ〜の」で設置して、「それ」で聴いても、よっぽど機器のポテンシャルが高くないと再現が厳しい音だ。それをあつさりクリアした。

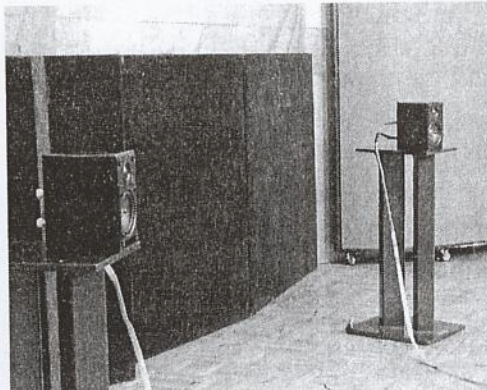


スピーカー位置のアンバランス実験にはB&W ノーチラス802(¥750,000/1本)を用意。駆動系には再びデノンDCD-SA10(¥350,000)、アキユフェーズ C-2800(¥1,100,000)、同P-7000(¥980,000)の登場を仰ぐ

システム全体を約40度傾ける。どうやら定在波の影響にお悩みの方への福音となりそうだ。音圧の向上をテスター田中が体感。が、「音にはいいがココロには良くない」と複雑な表情



プレーヤーにはデノンのユニバーサル機DVD-1400(¥66,000)を、アンプには小型・低発熱・高効率(160W/4Ω、100W/8Ω)・低価格デジタルパワーアンプのフライングモールドAD-M1(¥40,000/1台)をペアで使用。DAD-M1は入力ボリューム付きのため、プリアンプ・レスで用いた



オールルームSATは防磁構造のバスレフ型2ウェイ。能率は87dBと低めだが、音離れの良さや立ち上がりのスピードに不満なし。ラウンド構造、光沢仕上げとキャビネットにこだわり、カラーは赤、青、黒、白、シルバーの5色を用意。今回の試聴では黒を使用

スピーカー、リスナーによる三角形ノーマルポジションを聴いた後の改善だったので、ちょっととした驚きである。全体のエネルギー感も上がっている。部屋の平行面がなくなり定在波の影響を受けにくくなったから、とたまにはまともな1行で締めくくろうかと思ったが、止めた。

いくらなんでも、このセッティングは心理的な抵抗感を排除できない。これでは生活がなんだか落ち着かない。心休まる平穏な日々を過ごせるとは思えない。やっぱり「ありえね〜」なのだ。本当にいいのなら、村井さんリフォーム後にもやっているはずだし。

### 〈極端に間隔を広げる〉

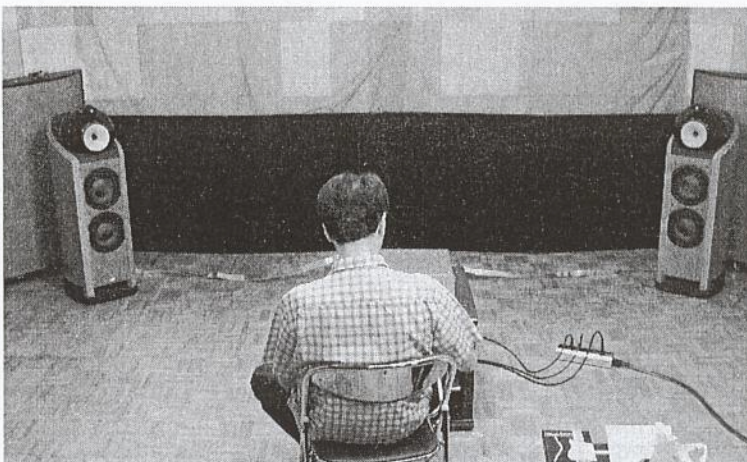
落ち着かないといえ、この音こそ落ち着かない。リスニング・ポジションと左右スピーカーを結ぶ三角形、その長辺が4〜5メートルで等辺は約2・5メートルである。形としては惱殺ビキニパン。

音の定位感がまるでない。世帯として、音が薄っぺら。なんだか知らないが左右のスピーカーを交互にきよるきよる見てしまいたくなる。

そこでスピーカー角度をより内振りに調整してみた。ちょっととした加減で、音場の出かたがまるで違ってきた。

気分を変えて他曲でもと、同CD収録のカリフォルニアのロング・ビーチ・アリーナのライブで「ハヴ・ユー・エヴァー・ラヴド・ア・ウーマン」をかけてみた。この巨大アリーナの真ん中やや後方からステ

お次は、スピーカーの角度を極端に広げる。その距離約5m。つまり前かがみ定位感皆無。そこで思い切り内振りにすると、ライブ会場の後方からステージを眺めるイメージに豹変した



ジを眺めるかのような像が浮き上がってきた。屈強なヒゲ男が肩車している半裸のカリフォルニア・ガールが前の方に見える(イメージ)。

しかしそうはいっても、広い部屋を無駄に使った奇異なセッティングであることは間違いない。もう1メートルでも左右のスピーカーを中央に寄せれば、さらに良好な結果が得られるのだらうけど、今回のテーマからはずれるので試さなかった。

### 〈真ん中に寄せる〉

さっきからずっと思っていて、いつか書こう書こうと思いついたが、ついここまできてしまった。ひとつ咳払いをしてから書かせてもらう。

これまでのアブノーマルな状況のコメントを読者の皆様は、あすのオーディオライフの糧としていただけるのだろうか？ うむ。疑問。というのは、この設定で心底

いくらなんでもこりゃナイでしょ。音も……



頭を抱えてしまったのだ。  
B & W ノーチラス 802 の間隔は、およそ5センチ。猫の子一匹通れない。これはないだろう。音は見かけの通りだ。度し難いほど窮屈。良し悪しのレベルでもない。センターに音がストンとは決まるわけでもないし。もしもこれだけの設置スペースしかないのなら、1本にしてモノラルで聴いた方がましだろう。

……ということで、外側に45度ほど向けると不満点、見事に解消。中央に集まる密度感が新鮮なサウンド。奥さんとの陣取り合戦に終止符を打つ、夫婦円満セッティング？



無理のない領域で鳴らしてみたが、同じ小型のオーディオ・プロ オールルームS ATから聴けた明らかに歌い上げるような伸びやかさが無い。息苦しい。

スペック上の道理には合っていたが、組み合わせ・相性という点で、未来の光明が見いだせそうにない。これこそ正真正銘の(ド)アンバランスだと切って捨てておく。

参考までに大出力アンプVTL MBI 85と高効率スピーカーJBL 4348の組み合わせを聴いてみた。理想的なコンビから超常的ハイパワー・サウンドを浴びた。生き返る思いがしたが、順当すぎる結果ではある。

### 小出力アンプ+高効率・大スピーカー

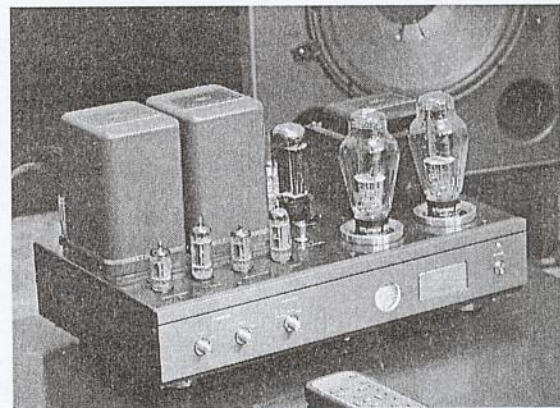
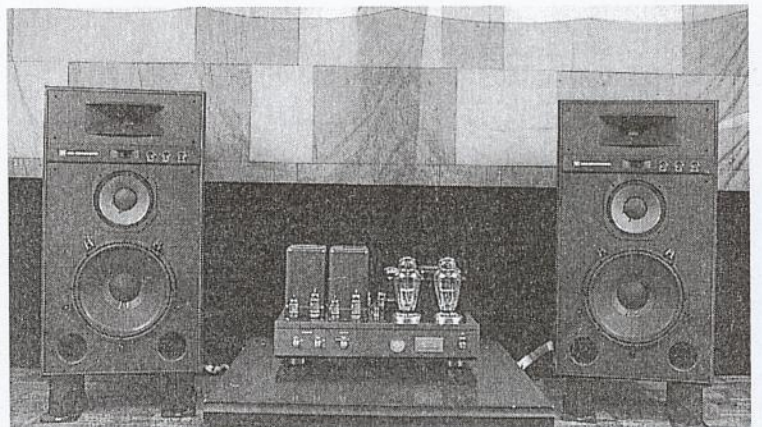
II エアータイト ATM300

+ JBL 4348

パワーアンプのエアータイトATM 300は8ワットの出力である。大丈夫か8ワット。「お〜きいことは、い〜ことだつ」という森永エールチョコレートのCMソングが、どこからか聴こえてくるのだが。価格は50万円。ということは1ワット当たり6万2500円か。いや、こういう計算をすること自体まったく不毛なのは承知している。しかしついつい電卓を叩いてしまった。せせこましい料簡は隠せない。

というようにバックボーンがあるゆえに、音出した途端の衝撃は大きかった。想像以上のパフォーマンスだった。

ATM300はスピーカーJBL 43



JBL 4348の能率はなんと95dB。これを8W+8Wのパワーアンプ、エアータイトATM-300で駆動する様は、サウンドも含めてまさしく「古き良きオーディオ」のもの

まるで寺尾VS小錦だ。いや、舞の海VS曙か(古い……)

ATM-300は、出力段にウエスタンエレクトリック社製300Bを贅沢にも採用(¥530,000/300Bなしは¥440,000)する純A級動作のシングルアンプ。バイアスチェックメーターを装備するため他社の300Bへの差し替えも可能だ

48を完全に手玉にとっていた。確かに4348の出力音圧レベルは95dB、まったくもって申し分のない高効率。だからといって38cmウーファーを軽々と動かすのは並大抵ではない。8ワットはそれをやったのだ。

アコースティック・ギターのエッジは鮮やかで、立ち上がりも鋭い。ソースに含まれるベースはたっぷりすぎて、下手するとモッコリ、ボコボコになってしまうが、そんな気配を見せない。

興に乗じて、エレクトリック・ギターをフイーチャーした曲も聴いてみるが、ストラトキャスターの甘く柔らかいトーンがたまらない。このページは各シチュエーショ

ンを比較するものではないのだが、この甘美なギターは、本日の最高値である。あらためて数字と音の不思議な関係を考えさせられた。

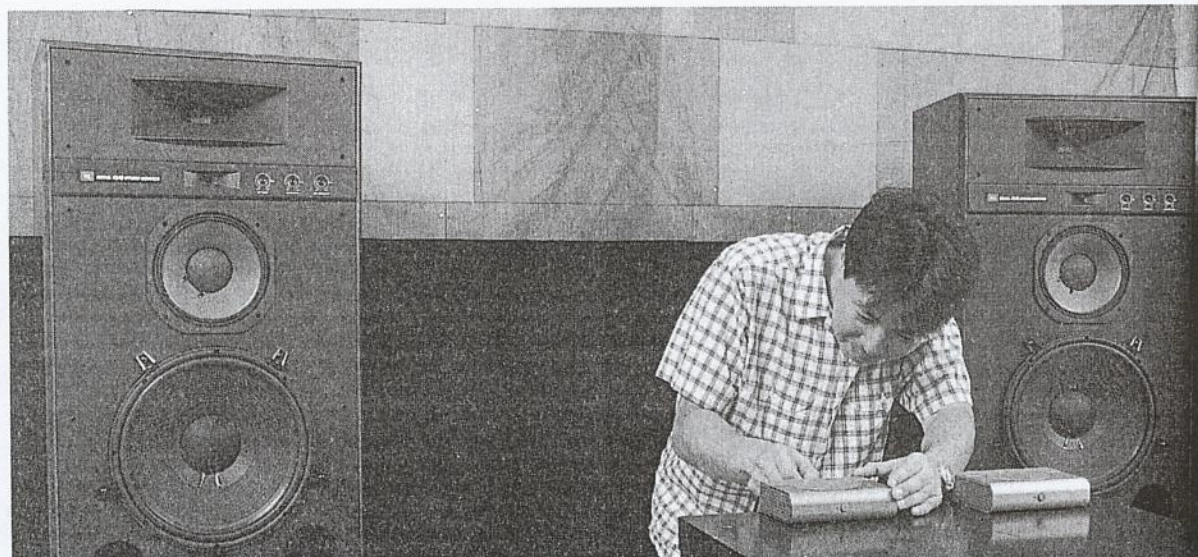
### 極小アンプ+巨大スピーカー

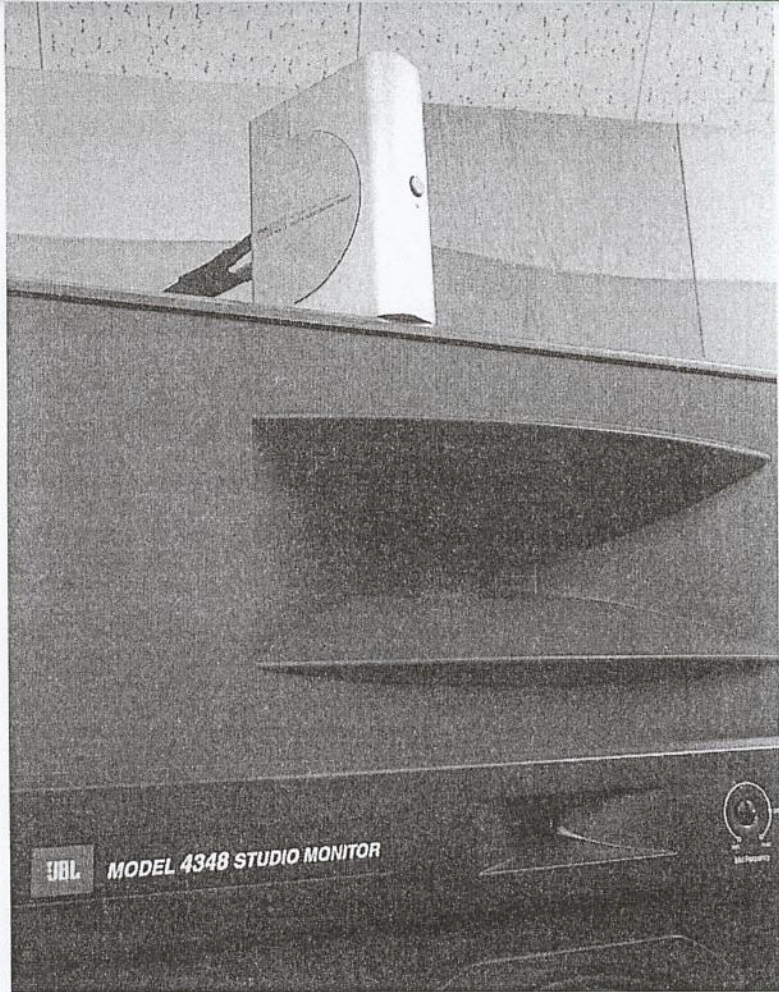
II フライングモールド DADMI

+ JBL 4348

フライングモールドDADMIが颯爽と再登場。

JBL 4348との大きさのアンバランスぶりには大いに笑える。スピーカーの背面にフックで取り付けて、スピーカーケーブル10cm未満もありだ。いやもしかして、





フライングモールドAD-M1はジャストでハガキサイズで大きさ15x10.6x4.1cm=651.9cm<sup>3</sup>、重さは0.78kg。JBL 4348は大きさ59.7x108x40cm=257904cm<sup>3</sup>、重さ90.7kg。その差は体積で395倍、重さ116倍！ よってこんなアブノーマルなセッティングもできる。実は可能性無限大ということが判明

これはいけるかもしれない。

この筐体でMr.マリックもびっくりのパワフル・サウンドは4348でも全開だ。なんでもフライングモールド社はJBL4350をリファレンスにして鳴らしているとのこと。1980年代初頭に登場、当時の最高峰4343をさらにスケールアップさせた46cmウーファー搭載の巨漢モデルである。なるほど生まれながらにして足腰の鍛え方が違うんだ。

それにしてもこれは示唆に富んだ組み合わせだ。

①4348のような大型スピーカーを買いたいが、アンプを置く場所がない方への有効な解決策として。

②4348のような高価なスピーカーを買

いたいが、アンプに予算が回らない方への有効な解決策として。

③4348のようなマルチユニット・スピーカーをマルチアンプ(バイアンプ)で鳴らしたいが、アンプを置く場所もなければ予算もない方への有効な解決策として。

ちなみに私はジャストで③に該当します。

フライングモールドにも弱点はある。「オレはこれ持つてせえ、使つてせえ」という所有の喜びがないこと。痛し痒しの小ささである。オーディオ的気分尊重派の私としてはこの点が大いにひっかかるが、マルチアンプとして複数駆動するならば話はずってくる。この箱が各ユニットをマンツーマンで面倒見てくれるなんて夢のようだ。

## C・アンバランスあれこれ

小型フルレンジスピーカーでSACDの良さが分かるか？

■富士通テン イクリプスTD307

小型フルレンジスピーカーを随分みくびつたタイトルがついている。同種のスピーカーを代表してテストされる富士通テンイクリプスTD307は責任が重い。これでSACDの良さが分からなかったら、業界から抹消されるな。



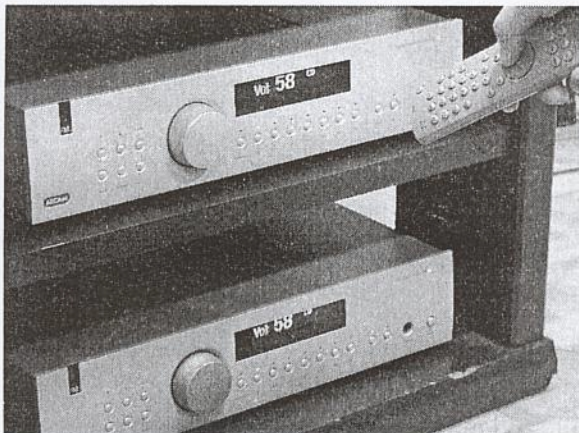
大部屋小スピーカー実験でも登場のデノンDVD-1400とフライングモールドAD-M1のマッチングで、SACDのハイスベック信号を小型フルレンジスピーカーへと注ぎ込む

ここで試聴曲をSACDにチェンジする。エルビス・コストロ夫人、ダイアナ・クラールのミリオンセラー・アルバム「ザ・ロック・オブ・ラヴ」から「ラヴ・レター」だ。

まず質問の答えだが「良さは分かる」。当たり前か。当然のことながらSACDの方が圧倒的にいい。ボーカルの定位、奥行き、響き、潤い、すべてにおいてはっきりと違う。



そこで用意したのが、富士通テンの卵型スピーカーの最小モデル、イクリプスTD307(¥16,000/1本)。極小6.5cmユニット一発ながら、克明にSACDの優位性を表現。示唆に富んだ実験となった



その違いの度合いは、高級システムより  
はるかに大きいのではないかと。つまり高級  
システムは通常CDでもそれなりに聴かす  
すべを心得ているが、廉価システムではソ  
ースに依存する比重というカウエイトが大  
きくなるため、CD、SACDの差がより  
歴然と表れるように思えた。普及価格帯で  
あればあるほどSACDは必須かもしれない。

何はともあれ富士通テンのイクリプスT  
D307PAは、小型フルレンジスピーカ  
ー代表として体面を保った。

### プリ・メインアンプ 1台→2台使用

### アーカム FMJ A32×2台

同一のプリ・メインアンプを2台使用

プリ・メインアンプを左右のスピーカー用に1台  
づつ使う。スピーカーがバイワイヤリング対応機  
ならば、高域/低域を分けてのバイアンプ駆動も  
可能。その前提には出力を2系統装備するプレー  
ヤーが必要となる。今回はデノンDCD-SA100  
(¥200,000)、アーカムFMJ A32(¥250,000)  
2台、JBL 4348というマッチングで実験

結果としてモノブロック構成のため、チャンネル  
セパレーション抜群！ リモコンを使えばアンプ  
のボリュームも2台連動操作が可能だ。アンバラ  
ンスどころか、グレードアップの一つの方向性  
として提案したい

するという、アンバランスというよりも、  
もはや無謀な空気を漂っている。しかし  
この結果は予想以上に良かった。まずは接  
続方法を説明しよう。

デノンDCD-SA100はアウトプ  
ット端子が2系統付いている。つまり2つ分  
の左チャンネル端子と右チャンネル端子が  
ある。これを2台のプリメインにそれぞれ  
振り分けてしまう。1台には左だけ、もう  
1台には右だけが入力される。つまり左担  
当と右担当のプリメインができたのである。

JBL 4348は2組のスピーカーター  
ミナルを装備しているので、アンプの左チ  
ャンネルを低域側、右チャンネルを高域側  
(逆でもよい)へ両スピーカーに接続して  
はい完了である。

プリメイン2台使用となると、ちょっと  
トリッキーな印象を隠せない  
が、プリ部分とパワー部分が  
左右モノブロック構成と考  
えれば、なかなか理にかなっ  
ていると思えてくるシステム  
である。

しかしながら、現実的には  
いちいち2つのボリューム操  
作は煩わしい。これはいとも  
あっさり解決した。アーカ  
ム FMJ A32はリモコ  
ン操作が可能で、近接してい  
ればひとつの作業で2台を同  
時にオペレートできた。

アンバランスこそが  
バランス。これ、真理なり



さて、1台と2台では音はどう違うか。  
ここでアンバランス・オーディオの真骨頂  
を体験することができた。2台使用ではチ  
ャンネル・セパレーションの良さが相当効  
いている。音が立った。ピタリと像が眼前  
に現れた。1台で出ていなかったベースの  
ンツンツンの重低音が明瞭に聴き取れる。  
プリ・メインアンプ2台で価格は50万  
円。同じ予算内でどこかのプリ+パワーと  
勝負してみたいところ。遜色ないところか、  
ねじ伏せてしまってもいい。